



《 武勇伝② 》

## 「温かい草履」 豊臣秀吉

～知恵を働かせ信頼を！～



今川家の松下加兵衛(まつしたかへえ)の家来になった「日吉丸」は、松下家で3年間仕えました。頑張って働き、その仕事ぶりを認められたものの、今川家では生まれ持つての地位やコネがないと出世は難しいので、「侍大将になる」という日吉丸の夢を叶えることはできません。

そこで、今度は尾張にもどって、織田一族の分家の大名、織田信長の小者(こもの)になりました。小物とは、主人の身のまわりの世話をする雑用係です。

ある寒い日…、信長は小物の日吉丸に言いました。



「サル！出かけるぞ！」

「はっ、かしこまりました。どうぞ、おはきものをおめしてください。」

「うむ。」

信長は、日吉丸がきれいに並べた草履(ぞうり)に足を入れて、怪訝な顔をしました。「むっ。この寒空に、なぜ草履が温かい。さてはサル、わしの草履を尻にしていたな。



この無礼者！」

「いいえ。そんな、めっそうもない。」

「では、なぜ草履が温かいのだ？」

信長にたずねられて、日吉丸は「待ってました」とばかりに言いました。

「はい！殿のおみ足が冷えてはならぬと、このふとこで温めておきました。」

日吉丸が自分の胸元を開くと、そこには草履の跡がくっきりと残っています。

この草履の跡は、日吉丸がわざとつけたものでした。

それを一目で見破った信長は、思わずニヤリと笑いました。

「ふっ。あざといが、顔にあわず頭の良いサルよ。」

生まれ持つての地位やコネがない日吉丸は、このように細かいことにも知恵を働かせながら信長に仕え、信長の信頼を少しずつ得るようになりました。

